

『リベラル』の正体

世界を覆うフランクフルト学派Ⅱ隠れマルクス主義者――』

◆著者――茂木 誠・朝香 豊
 ◆発行所――WAC
 ◆定価――九〇〇円(税別)



ISBN : 978-4-89831-870-6

「保守」同様、「リベラル」という言葉の定義も明確ではない。「リベラル」の不幸は、本書前書き「乗っ取られたりベラル」にあるように、世界恐慌期以降、「自由競争の規制、平等と分配の重

ル」に対する批判が、予備校講師の茂木誠氏と経済評論家の朝香豊氏によって対談形式で論じられる。対談なので読みやすいが内容は極めて濃い。

本書第1章では、最新時事問題であるロシアのウクライナ侵略を取り上げ、「リベラル」の迷走ぶりを紹介する。この戦争がプーチンによる侵略戦争であるのは明らかだが、「リベラル」は、戦争反対というお題目で侵略する側とされる側を区別なく批判し、それが結局プーチンを利することには目をつぶる。ウクライナを見れば、まともな日本人ならわが国の安全保障を心配するところだが、「リベラル」は自由と民主主義・法の支配が確立したわが国を信用しない。それどころか日本国家を危険視し、その戦力強化にはあらゆる妨害をし、逆にプーチン、習近平、金正恩らを強く非難しない。守るべきものと攻めるべきものとを倒錯した挙句、自分たちは意識が高いと思

いあがるのが「リベラル」である。「リベラル」Ⅱ隠れマルクス主義と喝破する本書の第3～5章は、マルクス主義の優れた解説書となっているが、今日「リベラル」を自認する人々でも自らをマルキストと信じている人はほとんどいないだろう。マルクス主義と「リベラル」とをつなぐ鍵が、本書第6章で紹介されるフランクフルト学派である。

フランクフルト学派とは、マルクス主義の唯物論に基づく革命路線に限界を感じたグラムシやルカーチの理論をもとに、1920年代からフランクフルト大学の社会研究所に集まったマルクス研究者のグループだ。グラムシら

は革命への道筋として、経済制度Ⅱ資本主義を倒すよりも価値観・文化を変革すべきとし、そのための主戦場は教育機関やメディアであると考えた。フランクフルト学派の中心人物であるホルクハイマーの「批判理論」は、現実社会は矛盾に満ちた間違った存在であることを前提として、否定し攻撃する対象と捉える。マルクーゼは、現体制に對しては徹底した非寛容を主張する一方、現体制を破壊しようとする者には寛容を求めた(抑圧的寛容)。

フランクフルト学派は1960年代の全共闘運動に多大な影響を与えたが、現代社会への浸透はその比ではない。「リベラル」の主張する、男女差をなくそうというジェンダーフリー、性的マイノリティの権利拡大を目指すLGBTQ、自国文化の優先を否定する多文化共生主義、文化的同一性を突き崩す移民容認論、差別用語は良くないとして徹底的な言葉狩りをするポリテイカル・コレクトネスなど、これらすべての根底に伝統的価値観の否定がある。彼らが多様性・寛容を主張しながら、自分たちと異なる価値観に対しては徹底的に非寛容であることもマルクラーゼの教え通りである。弱者の擁護を装いながら、やっているのは「批判理論」に基づく社会秩序の破壊ではないのか。「リベラル」には「善人」が多いようだ。より良い社会を作りたいのかも知れないが、彼らが現状否定の破壊衝動に突き動かされている限り、その果てにあるのは陰惨な無政府主義か暗黒の全体主義であろう。(広報部部員 満岡 渉)

視」を掲げる隠れマルクス主義者が「リベラル」を自称したために、本来の語義である「自由」とはほぼ正反対の政治理念に変容してしまったことだろう。本書ではこうした括弧つきの「リベラ